

目を高く上げて

「イザヤ書」40章21節から26節までを朗読。

26節「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない」。

5月のこの時期は大変気持ちの良い季節だと思います。殊に今年は晴天が続きまして、「博多どんたく」も、いつもは雨に降られるのですけれども、「今年は大丈夫」と思って楽しみにしていたようであります。この時期は本当に気持ちの良い時だと思いますが、特に今年はそう思います。新緑のきれいなこと、福岡と北九州の間を車で往復しますが、高速道路が人里離れて山間部を通っています。季節、季節に情景が変わっていきます。冬枯れで木々が葉を落として、全てが寒々しい様子になり、何とも見栄えのしない風景になります。ところが、今の時期になりますと、山の木々はうっそうと新緑に覆われて、燃え立つような力に溢れます。殊にこの時期、山野に命があふれるといえますか、湧きあがってくるような力強さを感じます。

秋は秋で、色づいた木の葉が目を楽しませてくれますし、また、その季節のいろいろな姿を見せてくれます。この大自然の営みを見るとき、もう一度、「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造

したかを見よ」との御言葉が響いてきます。私どもは神様を信じています。神様は「どういう御方なのか?」。つい日々の生活の中で、神様がいますことを実感するというか、それを手応えをもって感じ取る機会が少ないですね。朝起きて、目を覚ますなり、日々の生活が始まります。食事をしたり、買い物をしたり、仕事に出かけたりと、その間、「ここに神います」と、神様の不思議な御手がここにあると実感するときは、どれほどあるでしょうか? 案外、あるようでない。もちろん祈ることもあります。「こともある」といいますか、いつも祈っているに違いない。お祈りするとき、神様がいますことを信じて祈っているが、そのとき、神様を「どういう御方と信じているのか?」。いや、祈るときに「『この祈りを聞いてくださる神様は、こういう御方です』と、自覚して祈っているか」と言われると、案外忘れている。というのは、自分の心にある思いだけを何とか言葉に出して表現しますが、聞いてくださる御方は、今どういう御方であるか、あまり自覚されないままに祈っている。「天にいます我らの父なる神よ」と、最初の呼び掛けの祈りの言葉そのものが、既に「父なる神様」と、「神様」と言うときに、いま私のお祈りを聞いてくださる御方がどういう御方なのか? そこをしっかりと自覚していないことには、「この祈りは主の手に握っていただいた」「祈りは聞かれるんだ」と、信仰に立つことができません。信仰に立つとは、「いま私の祈りを聞いてくださる方は、こういう御方です」と、信じること

です。その祈りに確信を持てるときであります。祈りが、御心にかなうように、言葉を尽くして「主よ。こういう状況、こういう状態、こういう悩み、こういう苦しい……、こういう喜びがあります」と、心を尽くしてと聖書にありますから、心を尽くして思いを全部述べ尽くす。といっても、自分の思っていることを全部は言葉で表現できないが、思っていることを祈りの中で語り尽くす。それを聞いてくださった神様は……、「神様は、どういう御方でいらっしゃるのか？」。

大切なのは、このことです。私たちが祈るとき、祈りがどうであるかとか、その祈りに「これは神様が応えてくださるに違いない」「これは神様も喜びそうな話やから、神様はちゃんと応えてくださるに違いない」「これはやっけてくださるに違いない」と、自分の願い事の可能性をいつも考えるばかりでは、信仰にはならない。「では、何を信じるのか？」神様を信じる。祈りのうちに「私がいま祈っている、これを聞いてくださる御方、神様は、こういう神でいらっしゃる」と、そのことをはっきりと知って、自覚してそれを信じるのです。「そうです。あなたはできないことのない全能の神です」と告白する。それを信じるのが、私たちの信仰であります。「この話、この願い事、この祈りの課題が神に聞かれる」と信じること、それは言い換えると、それを聞いてくださる御方を信じることに他なりません。だから「エレミヤ書」に「**地を造られた主、それを形造って堅く立たせられた主、その名を主と名のっておられる者**

がこう仰せられる、**3 わたしに呼び求めよ**」(33:2~)と言われます。「**わたしに呼び求めなさい**」。そしてわたしとはどういう方か？「**地を造られた主、それを形造って堅く立たせられた主**」、文語訳では「**事を行うエホバ事をなしてこれを成就(とぐる)エホバその名をエホバと名のる者かく言ふ 3 汝われによび求めよ**」。「事を行うエホバ事をなしてこれを成就(とぐる)エホバ」、全ての事の始まりであり、全ての事を全うする力ある御方、神様が、「わたしに呼び求めなさい」とおっしゃる。だから、祈りは、神様が全ての事を支配し、それを導き、全うしてくださる御方、その神様を信じることです。私どもは、どちらかという、自分の願い事を信じる。事柄を信じることに集中して、「相手は誰であるか？」「それは神様だろう」と、神様ではあるが、その神様をどういう御方と信じるのか？

だから「イザヤ書」40章21節に「**あなたがたは知らなかったか。あなたがたは聞かなかったか**」と。「何を？」「神様がどういう方であるかを」。22節以下に「**主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいなごのように見られる。主は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、²³ また、もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなしくされる**」とあります。神様は、「地球のはるか上に座して」、「はあ、どの辺りかしら？」「ロケットで届くかしら？」、この「はるか上」というのは、物理的な位置関係を言っているのではありません。私たちは到底測りしれない大きな存在、

力ある御方、知恵に満ちた御方、そういう意味で「地球のはるか上」と、人の知識で取り込まれるような、それですべてを理解できるような御方ではない。地球に住んでいる者はその地球の枠の中でしか考えられない。それ以上のことができない私たちです。それよりももつとはるか上に居給う、そして「もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなしくされる」。歴史を導き給う御方、いろいろな時代に、支配してきた巨大な国が、あるいは強力な皇帝といわれる人たちがいます。かつてローマ帝国といわれた時代があります。イエス様の時代がありますが、地中海のほとんどをその支配下に治めた国であります。ヨーロッパにはいろいろな所にローマ帝国の遺跡が残っています。ヨーロッパの北の方、「こんな所にも」と思うぐらい、イギリスの北の方もそうではありますが、北欧の国々にもローマ時代の遺跡が残っている。「よくぞ、こんな所まで自分たちの勢力範囲にしたものだ」と思います。それほど大きな力を持ち、一世を風靡（ふうび）した皇帝たちは、今はどこにいる？ いない。23 節に「もろもろの君を無きものとせられ」と、全ての時代を支配したこの世の権力者たちは、もはや姿形も無い。そしてかつてのローマという国は、いまはイタリアの一都市の名前でしか残っていません。かつて大英帝国といって、「日の昇る所から日の沈む所まで、全て我が領土」「太陽の没する所のない国」を誇っていた大英帝国も、今では北の方の小さな島国に残っているだけであります。またヨーロッパの国々を支配したナポレオン帝

国もそうであります。時代は全て変わって行きます。全ての皇帝を作り立て、そして滅ぼされたのも神様です。全てのものを 24 節にありますように、「**彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、その幹がかろうじて地に根をおろしたとき**」と、「かろうじて」が繰り返して強調される。人が何とかしながら組み立てたと思った、そこに神様が風を吹かれると、一吹きで、その全ての力は、権力は、大国は、帝国は、わらのように吹き飛ばされてしまう。その跡は無くなってしまう。

先頃いろいろな国際的なニュースで、皆さんも関心があったと思いますが、北朝鮮の問題があります。ミサイルが飛んできて、明日にでも戦争が始まるような不安を覚えたかもしれません。しかし、考えてみると、歴史はそうやって作られてきたのです。時に暴君が、得体のしれない訳のわからない支配者が、ヒットラーのような者が出てきて、多くの人々がそれに惑わされるような事態がありました。それもこれも神様の手の中のことなのです。だから、おそらくいつかは、そういう戦争が起こって、第三次世界大戦ですか、そういうものがいつかあるかもしれません。しれないどころか、おそらくあるでしょう。いろいろな国が核兵器を持って、撃ち合う、やり合うような事態が起こって、民族が滅びていく。そうやって滅びてきた世界の歴史がすでにある。なぜそんなことが起こるのか、これは私たちには分からない。人がどんなに手立てを尽くしても、全ての事の背後に、全てを支配していらっしゃる神様がおられ

るからです。神様は、全てのものが終わる時が来ることをはっきりと語っています。終末がもう間もなく来ようとしている時代であることは確かであります。だからといって、今日明日どうなるかと、うろたえることはいらないと聖書には語られています。しかし「**気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである**」(マルコ 13:33)と。だから平和な日本がこのまま続く、そうあれと願いますが、しかし、神様は、全ての人の思いを越えて、もっと大きな、もっと悠久の時の中で、私たちを持ち運んでおられます。それがいつどうなるのか、地上の人生、90年、80年、100年そこそこの人生が全てだと思っていますが、神様の目からご覧になれば、千年、二千年は一夜の夢のごとく、一日のごとく過ぎていく。そういう長い歴史の中に、今、今日という本当に僅かな一瞬の時を、神様によって生かされている。今日こうして健康を与えられているのも、神様が良しとしてください、この日この時を与えてくださっておられる。これから先もこのままで行けるか？それは分かりません。神様は、私たち一人ひとりにご計画をもって、大きな御業をもって、私たちを絶えず握ってくださるからです。

「詩篇」104篇 10節から 13節までを朗読。

神様は、泉を設け、流れを造りだし、そこに住む様々な生き物に水を与え、また全てのものの渇きを癒してくださる御

方。また神様は、私たちの見る大自然の全ての中の生き物をご自身のご計画と力によって養ってくださる。生きる命を与えると同時にその終わりをも決められる。イエス様が「何事も思いわずらってはならない」とおっしゃいます。その中で「**空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる**」(マタイ 6:26)と。まことにそのとおりです。空のスズメですらも、主の許しなしでは一羽も地に落ちない。そして彼らの食べる物も飲む水も、生活の場も、神様はきちんと備えてくださる。そして時が来たならば、終わりをもちきちんと決めてくださる。私たちは飛びまわるスズメの姿は見ますが、あちらでも死んでいる、こちらでも死んでいる様子など見たことはないでしょう。どこで死ぬのか分かりません。気が付かないうちに、神様は一つひとつの生き物の終わりを決めてくださる。私たち人間だけです、偉そうに「俺はいつ死ぬだろうか、いつだろうか」と心配しているのは。「野の花を見よ」と、「**栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった**」(マタイ 6:29)と。ここにも素晴らしい花が咲いていますが、見事な色と形とを造りだした神様は、惜しみなくそれを枯らせてしまう訳であります。「じゃ、枯れてしまったらおしまいか」と、またそこから新しい命を生み出してくださるのも神様です。

13節に「**あなたはその高殿からもろもろの山に水を注がれる。地はあなたのみ**

わざの実をもって満たされる」とあります。神様の御業の実、神様の恵みに満ちている。更にその先の14節以下を読みますと、「あなたは家畜のために草をはえさせ、また人のためにその栽培する植物を与えて、地から食物を出させられる。15すなわち人の心を喜ばすぶどう酒、その顔をつややかにする油、人の心を強くするパンなどである」。「人のためにその栽培する植物を与えて」と、私たちの日々の生活の糧である稲にしろ、麦にしろ、いろいろな物を、神様が私たちに食べる物として与えてくださる。そして私たちの体を健やかにし、楽しませてくださる。それら全ての物を神様は備えられる。

「詩篇」104篇17節から20節までを朗読。

神様は、一日を造り、太陽を創り、朝を造り、夜を造り、また闇を創造なさる。そこに住む様々な生き物を神様は創られる。確かに大自然の営みを見ていると、そこに不思議としか言いようのないものがいくらかでもあります。夜の闇でしか動くことのできない生き物もいれば、昼間に活動するものもおります。夜になるとねぐらに帰るものもいれば、夜になると出てくるものもいます。誰がそういう全てのものの仕組みを造りだし、生きとし生けるものに命を与え、食べる糧を与え、また住むべき場所を備えておられるのでしょうか？ここは、神様がその全てを、一つひとつを造りだしてくださると語られています。

「詩篇」104篇21節から24節までを朗読。

24節に「地はあなたの造られたもので満ちている」と。神様は、全ての生き物を創り、その活動をする力を与え、それと同じように私たち人間も、また日の出と共に業につき、その勤労は夕べに及び、食べる糧を神様はきちんと備えてくださる。神様の大きな力は、私たちがどんなに考えてもそれを考え尽くすことはできません。極め尽くすことはできません。しかし、私たちの知る範囲で、その背後にある神様のわざを深く思い見るとき、驚くべき不思議としか言いようのない事態を見るばかりであります。まさに24節に言われるように、「あなたのみわざはいかに多いことであろう」、しかも「あなたはこれらをみな知恵をもって造られた」。人が考えて、「どうしてこうなった？」「何でこうなった？」と、いろいろなことを言います。科学者や研究者はいろいろな物を詳しく調べますが、その根本の理由は分からない。神様の知恵は私たち人が測り知ることができないからです。そういう神様の御業の中に、私たち一人一人も、生きる命を与えられ、糧を与えられ、生活の場を備えられて、今ここに生きている。この事は決して忘れてはならないことです。ところが、すぐに忘れるのです。そして自分の力と努力で、自分の知恵で人の世は動いていくかのように思います。しかし、決してそうではない。万物を創造し、全てを今も深いご計画と知恵をもって神様は、一つひとつを養い育て、持ち運んでくださっている。今日、

こうやって元気で健康を与えられて、ここに集うことができたのも、これも神様が良しとしてくださったことに他ならない。また、神様は、私たちを動けないような事態や事の中に入れるかもしれません。しかし、それとても、神様が良しとし給うことで、「すべての道で主を認めよ」（箴言 3:6）とあるように、そこにも創り主でいらっしゃる神様のわざがあることを信じて行かなければ、「神を信じた」とは言えません。まさに、そこにも「**地はあなたの造られたもので満ちている**」。神様の造られた全てのもので満ちている。

「詩篇」104 篇 25 節から 28 節までを朗読。

大海原があり、そこに「レビヤタン」と、これはクジラだといわれていますが、そういう生き物が沢山生きているわけです。「BBC」という英国放送協会が作った『オーシャンズ』という素晴らしいドキュメンタリー番組があります。私はそれを見るたびに、「神様って本当に不思議な事をなさるな」と思います。海の中の生態をいろいろな角度から実写で記録した番組です。クジラの生態すらも私たちにはよく分かりません。どこでどういふふうに住生活が営まれているか、何千キロという大海原を移動して行くのです。また小さなイワシの群れが何万匹という群れをなして雲のように海の中をさまよって行きます。そこにイルカがやってきて、その群れをザーッと追いかけますが、「全部食べられるのか」と思うと、案外そうではないのです。食べられそうでなかなか

か食べられない。実にその一つひとつの生き物の生き様を、神様は造りだしていらっしゃるのです。ウミガメが卵を産む。しばらくすると、その卵がふ化をする。小さなカメがかえるのです。それが地表に顔を出して、浜辺に向かって走りだす。それを待っていたかのようにカツオドリがやってくる。つぎつぎと産まれたばかりのカメの子どもを食べる。無残な気がします。しかし、全部は食べ尽くさない。必ずその中から生き残って海へ入っていく。神様は、一つひとつの生き物に食べる物を与え、それを養っていらっしゃる。人間的な感情から言うならば、「可哀想に、産まれた全てのカメの子どもたちが生き延びてくれれば……」と思います。見ていると鳥が腹立たしく思えます。しかし、一方鳥から見ると、それは彼らにとって大切な食べ物であります。それなくしては彼らの命は保てない。神様は、全てのを過不足なく、きちっと保ってくださる。持ち運んでいらっしゃる。私は、その海の様々な生態の姿を記録で見ますと、ただ不思議、「どうしてこんなことが起こるのだろうか？」と思わざるを得ません。

まさにここに語られているとおりであります。27 節に「**彼らは皆あなたが時にしたがって食物をお与えになるのを期待している**」と。神様が、食べる物をそれぞれの生き物に与えておられる。28 節以下に「**あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる。**」²⁹ **あなたがみ顔を隠されると、彼らはあわてふため**

く。あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んでちに帰る。30 あなたが霊を送られると、彼らは造られる。あなたは地のおもてを新たにされる」。全て神様のご計画と御思いの中で全てのものが造りだされ、また持ち運ばれているのです。私たちの生活もそうです。年金がどうか、日本の経済がどうかであるとか、私たちの生活は新聞の紙面に現れてくるニュースに一喜一憂しながら、右にするか左にするか、どうするかこうするかばかりを思い患い、心配していますが、しかし、全てのことの背後に万物を創造された神のいますことを、私たちは決して忘れてはならない。

「イザヤ書」40章25節に「**聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか』**」。神様をどういう御方と見ているか、信じているのか。「目を高くあげて」と、心の目をもっと見えないものに目を留める。見えているこの現実の生活が全てではなく、この背後にもっともっと私たちの測り知れない神様の御思い、御心があることを決して忘れてはならない。そして、その神様は、どんな神なのか？ ひとり子を賜うほどに私たちを愛してやまない愛なる神様です。十字架を見上げてその背後にある神様のご愛、全てのものをそのご愛の御手をもって持ち運んでいらっしゃる、生かしておられる。「目を高くあげて」と、つい私たちは目先のこと、周囲のこと、生活のこと、見えること、自分の考えられる範囲だけのことで、良いだとか悪いだとか、うま

く行ったとか行かなかったとか、失望したとか、がっかりしたとか言いますが、そのような人の思いを越えて、神様は着実に一つひとつ全ての事を、ご自身の御心のままに導いてくださるのです。

ですから、私たちが受ける様々な事柄や事態は、人がしているのでもなく、誰がしているのでもなく、神様がいま私のために備えてくださった一つの出来事として、感謝して受ける。神様は、どういうふうにもそこから私たちを持ち運んでくださるか分からない。しかし、必ず神様は、愛をもっていちばん善い事をしてくださる。このことを決して忘れてはならないし、絶えず信じて行きたいと思う。その後に「**主は数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる**」。神様は、全てのものの一つひとつを細かくみな知りつくしておってくださる。「主は数をしらべて万軍をひきいだし」と、神様は、十把一からげまとめてということではなく、その中の一つひとつ、小さなものまでも、ということであります。「**おのおのをその名で呼ばれる**」と、全ての事を私たち一人ひとりの名を知っていらっしゃる。「名を知る」とは、その人の全てを、頭の先から足の先までことごとく知り尽くしておられる。自分のことが自分でも分からないのに、神様は全部それを知っていらっしゃる。だから「**その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに**」、神様の絶大な力、大能の力のゆえに「**一つも欠けることはない**」。神様のなさるわざは、どれ一つ間違いがない。欠けるところ、不足するところ、

失敗したということは決してないというのです。人のすることは、想定外がいくらでもあります。これは当然であります。神様のなさるわざでは「一つとして欠けるところはない」。決して過不足のないことをしてくださる。

私たちの信ずべき御方、神、万物の創造者でいらっしゃる神様は、いま私に何を、どういうことをして下さっていらっしゃるか、もう一度、今の自分をしっかりと神様のものとして、神様の作品として、神様に造りだされた者として、もう一度感謝して受けたいと思います。それは今、自分にとって都合が良かろうと悪かろうと、自分が願ったとおりであろうとなかろうと、「いま置かれているここに神様が、知恵をもって私を導き運んでくださった」。そして、神様は、これからもなお私の全てを知ってくださって、ことごとく善をなしてくださる。「善きもので満ちている」と約束されているように、全てのもを最善に造りだしてくださる御方でいらっしゃるから、恐れなくてこの主を信頼して、つねに「目を高く上げて」、上を見続ける。小さなことに捕われなくて、あれやこれや人の言葉や見えるところに引っ張られないで、常に主を見上げて行きたいと思います。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。